オツベルと象

宮沢　賢治

……ある牛飼いが物語る。

第一日曜

オツベルときたらたいしたもんだ。稲こき機械の六台も据えつけて、のんのんのんのんのんのんと、おおそろしない音をたててやっている。

十六人の百姓どもが、顔をまるっきり真っ赤にして足で踏んで機械を回し、小山のように積まれた稲をかたっぱしからこいていく。わらはどんどん後ろの方へ投げられて、また新しい山になる。そこらは、もみやわらから立った細かなちりで、変にぼうっと黄色になり、まるで砂漠の煙のようだ。

その薄暗い仕事場を、オツベルは、大きな琥珀のパイプをくわえ、吹き殻をわらに落とさないよう、目を細くして気をつけながら、両手を背中に組み合わせて、ぶらぶら行ったり来たりする。

小屋はずいぶん頑丈で、学校ぐらいもあるのだが、なにせ新式稲こき機械が、六台もそろって回ってるから、のんのんのんのんふるうのだ。中に入るとそのために、すっかり腹がすくほどだ。そして実際オツベルは、そいつで上手に腹を減らし、昼飯時には、六寸ぐらいのビフテキだの、雑巾ほどあるオムレツの、ほくほくしたのを食べるのだ。

とにかく、そうして、のんのんのんのんやっていた。

そしたらそこへどういうわけか、その、白象がやってきた。白い象だぜ、ペンキを塗ったのでないぜ。どういうわけで来たかって？　そいつは象のことだから、たぶんぶらっと森を出て、ただなにとなく来たのだろう。

そいつが小屋の入り口に、ゆっくり顔を出した時、百姓どもはぎょっとした。なぜぎょっとした？　よくきくねえ、何をしだすか知れないじゃないか。かかり合っては大変だから、どいつも皆、一生懸命、自分の稲をこいていた。

ところがその時オツベルは、並んだ機械の後ろの方で、ポケットに手を入れながら、ちらっと鋭く象を見た。それからすばやく下を向き、なんでもないというふうで、今までどおり行ったり来たりしていたもんだ。

すると今度は白象が、片足床に上げたのだ。百姓どもはぎょっとした。それでも仕事が忙しいし、かかり合ってはひどいから、そっちを見ずに、やっぱり稲をこいていた。

オツベルは奥の薄暗い所で両手をポケットから出して、も一度ちらっと象を見た。それからいかにも退屈そうに、わざと大きなあくびをして、両手を頭の後ろに組んで、行ったり来たりやっていた。ところが象が威勢よく、前足二つ突き出して、小屋に上がってこようとする。百姓どもはぎくっとし、オツベルも少しぎょっとして、大きな琥珀のパイプから、ふっと煙を吐き出した。それでもやっぱり知らないふうで、ゆっくりそこらを歩いていた。

そしたらとうとう、象がのこのこ上がってきた。そして機械の前のとこを、のんきに歩き始めたのだ。

ところがなにせ、機械はひどく回っていて、もみは夕立かあられのように、パチパチ象に当たるのだ。象はいかにもうるさいらしく、小さなその目を細めていたが、またよく見ると、確かに少し笑っていた。

オツベルはやっと覚悟を決めて、稲こき機械の前に出て、象に話をしようとしたが、その時象が、とてもきれいな、うぐいすみたいないい声で、こんな文句を言ったのだ。

「ああ、だめだ。あんまりせわしく、砂が私の歯に当たる。」

全くもみは、パチパチパチパチ歯に当たり、また真っ白な頭や首にぶっつかる。

さあ、オツベルは命がけだ。パイプを右手に持ち直し、度胸をすえてこう言った。

「どうだい、ここはおもしろいかい。」

「おもしろいねえ。」象が体を斜めにして、目を細くして返事した。

「ずうっとこっちにいたらどうだい。」
百姓どもははっとして、息を殺して象を見た。オツベルは言ってしまってから、にわかにがたがた震えだす。ところが象はけろりとして、
「いてもいいよ。」と答えたもんだ。
「そうか。それではそうしよう。そういうことにしようじゃないか。」オツベルが顔をくしゃくしゃにして、真っ赤になって喜びながらそう言った。
どうだ、そうしてこの象は、もうオツベルの財産だ。いまに見たまえ、オツベルは、あの白象を、働かせるか、サーカス団に売り飛ばすか、どっちにしても万円以上もうけるぜ。

第二日曜

オツベルときたらたいしたもんだ。それにこの前稲こき小屋で、うまく自分のものにした、象も実際たいしたもんだ。力も二十馬力もある。だいいち見かけが真っ白で、牙は全体きれいな象牙でできている。皮も全体、立派でじょうぶな象皮なのだ。そしてずいぶん働くもんだ。けれどもそんなに稼ぐのも、やっぱり主人が偉いのだ。
「おい、おまえは時計はいらないか。」丸太で建てたその象小屋の前に来て、オツベルは琥珀のパイプをくわえ、顔をしかめてこうきいた。
「僕は時計はいらないよ。」象が笑って返事した。
「まあ持ってみろ、いいもんだ。」こう言いながらオツベルは、ブリキでこさえた大きな時計を、象の首からぶら下げた。
「なかなかいいね。」象も言う。
「鎖もなくちゃだめだろう。」オツベルときたら、百キロもある鎖をさ、その前足にくっつけた。
「うん、なかなか鎖はいいね。」三足歩いて象が言う。
「靴を履いたらどうだろう。」
「僕は靴など履かないよ。」
「まあ履いてみろ、いいもんだ。」オツベルは顔をしかめながら、赤い張り子の大きな靴を、象の後ろのかかとにはめた。
「なかなかいいね。」象も言う。
「靴に飾りをつけなくちゃ。」オツベルはもう大急ぎで、四百キロある分銅を、靴の上から、はめ込んだ。
「うん、なかなかいいね。」象は二足歩いてみて、さもうれしそうにそう言った。
次の日、ブリキの大きな時計と、やくざな紙の靴とは破け、象は鎖と分銅だけで、大喜びで歩いておった。
「すまないが税金も高いから、今日はすこうし、川から水をくんでくれ。」オツベルは両手を後ろで組んで、顔をしかめて象に言う。
「ああ、僕水をくんでこよう。もう何杯でもくんでやるよ。」
象は目を細くして喜んで、その昼過ぎに五十だけ、川から水をくんできた。そして菜っ葉の畑にかけた。
夕方象は小屋にいて、十把のわらを食べながら、西の三日の月を見て、
「ああ、稼ぐのは愉快だねえ、さっぱりするねえ。」と言っていた。
「すまないが税金がまた上がる。今日はすこうし、森から薪を運んでくれ。」オツベルは房のついた赤い帽子をかぶり、両手をかくしに突っ込んで、次の日象にそう言った。
「ああ、僕薪を持ってこよう。いい天気だねえ。僕はぜんたい森へ行くのは大好きなんだ。」象は笑ってこう言った。
オツベルは少しぎょっとして、パイプを手から危なく落としそうにしたが、もうその時は、象がいかにも愉快なふうで、ゆっくり歩きだしたので、また安心してパイプをくわえ、小さなせきを一つして、百姓どもの仕事のほうを見に行った。
その昼過ぎの半日に、象は九百把薪を運び、目を細くして喜んだ。
晩方象は小屋にいて、八把のわらを食べながら、西の四日の月を見て、
「ああ、せいせいした。サンタマリア。」と、こう独り言したそうだ。
その次の日だ。
「すまないが、税金が五倍になった。今日はすこ

うし鍛冶場へ行って、炭火を吹いてくれないか。」
「ああ、吹いてやろう。本気でやったら、僕、もう、息で、石も投げ飛ばせるよ。」
オツベルはまたどきっとしたが、気を落ち着けて笑っていた。
象はのそのそ鍛冶場へ行って、べたんと足を折って座り、ふいごの代わりに半日炭を吹いたのだ。
その晩、象は象小屋で、七把のわらを食べながら、空の五日の月を見て、
「ああ、疲れたな、うれしいな、サンタマリア。」
と、こう言った。
どうだ、そうして次の日から、象は朝から稼ぐのだ。わらも昨日はただ五把だ。よくまあ、五把のわらなどで、あんな力が出るもんだ。
実際、象は経済だよ。それというのもオツベルが、頭がよくて偉いためだ。オツベルときたらたいしたもんさ。

第五日曜

オツベルかね、そのオツベルは、俺も言おうとしてたんだが、いなくなったよ。
まあ落ち着いて聞きたまえ。前に話したあの象を、オツベルは少しひどくしすぎた。仕方がだんだんひどくなったから、象がなかなか笑わなくなった。ときには赤い竜の目をして、じっとこんなにオツベルを見下ろすようになってきた。
ある晩、象は象小屋で、三把のわらを食べながら、十日の月を仰ぎ見て、
「苦しいです。サンタマリア。」と言ったということだ。
こいつを聞いたオツベルは、ことごと象につらくした。
ある晩、象は象小屋で、ふらふら倒れて地べたに座り、わらも食べずに、十一日の月を見て、
「もう、さようなら、サンタマリア。」と、こう言った。
「おや、なんだって？　さようならだ？」月がにわかに象にきく。
「ええ、さようならです。サンタマリア。」
「なんだい、なりばかり大きくて、からっきし意気地のないやつだなあ。仲間へ手紙を書いたらいいや。」月が笑ってこう言った。
「お筆も紙もありませんよう。」象は細ういきれいな声で、しくしくしくしくしく泣きだした。
「そら、これでしょう。」すぐ目の前で、かわいい子どもの声がした。象が頭を上げて見ると、赤い着物の童子が立って、すずりと紙をささげていた。象は早速手紙を書いた。
「僕はずいぶんめに遭っている。みんなで出てきて助けてくれ。」
童子はすぐに手紙を持って、林の方へ歩いていった。
赤衣の童子が、そうして山に着いたのは、ちょうど昼飯頃だった。この時、山の象どもは、沙羅樹の下の暗がりで、碁などをやっていたのだが、額を集めてこれを見た。
「僕はずいぶんめに遭っている。みんなで出てきて助けてくれ。」
象は一斉に立ち上がり、真っ黒になってほえだした。
「オツベルをやっつけよう。」議長の象が高く叫ぶと、
「おう、出かけよう。グララアガア、グララアガア。」みんなが一度に呼応する。
さあ、もうみんな、嵐のように林の中を鳴き抜けて、グララアガア、グララアガア、野原の方へとんでいく。小さな木などは根こぎになり、やぶやなんかもめちゃめちゃだ。グワア　グワア　グワア　グワア、花火みたいに野原の中へとび出した。それから、なんの、走って、走って、というと向こうの青くかすんだ野原の果てに、オツベルの屋敷の黄色な屋根を見つけると、象は一度に噴火した。
グララアガア、グララアガア。その時はちょうど一時半、オツベルは皮の寝台の上で昼寝の盛りで、からすの夢を見ていたもんだ。あまり大きな音なので、オツベルの家の百姓どもが、門から少し外へ出て、小手をかざして向こうを見た。林のような象だろう。汽車より速くやってくる。さあ、

まるっきり、血の気もうせて駆け込んで、「だんなあ、象です。押し寄せやした。だんなあ、象です。」と、声を限りに叫んだもんだ。

ところがオツベルはやっぱり偉い。目をぱっちりとあいた時は、もうなにもかもわかっていた。

「おい、象のやつは小屋にいるのか。いる？　いる？　いるのか。よし、戸を閉めろ。戸を閉めるんだよ。早く象小屋の戸を閉めるんだ。ようし、早く丸太を持ってこい。閉じこめちまえ、ちくしょうめじたばたしやがるな、丸太をそこへ縛りつけろ。何ができるもんか。わざと力を減らしてあるんだ。ようし、もう五、六本、持ってこい。さあ、だいじょうぶだ。だいじょうぶだとも。慌てるなったら。おい、みんな、今度は門だ。門を閉めろ。かんぬきをかえ。突っ張り。突っ張り。そうだ。おい、みんな心配するなったら。しっかりしろよ。」オツベルはもう支度ができて、ラッパみたいないい声で、百姓どもを励ました。ところがどうして、百姓どもは気が気じゃない。こんな主人に巻き添えなんぞ食いたくないから、みんなタオルやハンケチや、汚れたような白いようなものを、ぐるぐる腕に巻きつける。降参をする印なのだ。

オツベルはいよいよ躍起となって、そこら辺りを駆け回る。オツベルの犬も気がたって、火のつくようにほえながら、屋敷の中をはせ回る。

まもなく地面はぐらぐらと揺られ、そこらはばしゃばしゃ暗くなり、象は屋敷を取り巻いた。グララアガア、グララアガア、グララアガア、その恐ろしい騒ぎの中から、

「今助けるから安心しろよ。」優しい声も聞こえてくる。

「ありがとう。よく来てくれて、ほんとに僕はうれしいよ。」象小屋からも声がする。さあ、そうすると、周りの象は、いっそうひどく、グララアガア、グララアガア、塀の周りをぐるぐる走っているらしく、たびたび中から、怒って振り回す鼻も見える。けれども塀はセメントで、中には鉄も入っているから、なかなか象も壊せない。塀の中にはオツベルが、たった一人で叫んでいる。百姓どもは目もくらみ、そこらをうろうろするだけだ。そのうち外の象どもは、仲間の体を台にして、いよいよ塀を越しかかる。だんだん、にゅうと顔を出す。そのしわくちゃで灰色の、大きな顔を見上げた時、オツベルの犬は気絶した。さあ、オツベルは撃ちだした。六連発のピストルさ。ドーン、グララアガア、ドーン、グララアガア、ドーン、グララアガア。ところが弾は通らない。牙に当たれば跳ね返る。一匹なぞはこう言った。

「なかなかこいつはうるさいねえ。パチパチ顔へ当たるんだ。」オツベルはいつかどこかで、こんな文句を聞いたようだと思いながら、ケースを帯から詰め替えた。そのうち、象の片足が、塀からこっちへはみ出した。それからも一つはみ出した。五匹の象がいっぺんに、塀からどっと落ちてきた。オツベルはケースを握ったまま、もうくしゃくしゃに潰れていた。早くも門が開いていて、グララアガア、グララアガア、象がどしどしなだれ込む。

「牢はどこだ。」みんなは小屋に押し寄せる。丸太なんぞは、マッチのようにへし折られ、あの白象は大変痩せて小屋を出た。

「まあ、よかったね、痩せたねえ。」みんなは静かにそばに寄り、鎖と分銅をはずしてやった。

「ああ、ありがとう。ほんとに僕は助かったよ。」白象は寂しく笑ってそう言った。

おや、川へはいっちゃいけないったら。